

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目 交通まちづくりにおける認識の同型性の構築に関する研究  
—長久手地域におけるリニモ問題を事例として—  
A Study of Constructing Social-cognitive Isomorphism in Transport-based Community Development—Focusing on the Linimo Issue in Nagakute Area—

氏 名 島田 善規

## 論 文 内 容 の 要 旨

### 第1章 研究の背景、研究の目的、研究の方法、論文の構成

持続可能な交通政策が目指されているなか、交通に関連するまちづくりの現場では、政策・事業の計画段階のみならず、評価段階においても論争の状態が生じており、これを改善する手法が求められている。新交通システム・リニモをめぐって、沿線の愛知県長久手市など東部丘陵地域では、論争の状態が起きた。リニモは地域にとってマイナスであるという認識は存在するが、リニモ沿線の愛知県長久手地域は、「発展」が続いている地域である。本稿は、この地域の変化を上からのまちづくりの成功と限界と批判的に評価し、この限界の一つの現れである「リニモ問題」を事例として、論争の状態の改善に取り組む。

リニモ問題とは、地域環境問題について「個別主体間の状況の定義のズレ」がおきるほど社会的認識の同型性が失われた問題であると定義する。「交通」と「地域の変化」についての「市民」の認識がズレた問題である。状況の定義のズレとは、「地域環境問題の集会的定義過程における社会的認識のズレ」であるとされる（脇田健一 2001）が、リニモ問題では個別主体間でさえ問題の定義が混迷していた。出来事があまりにも複雑であるために、事実の一部が反映された多様な解釈（認識）が人々の間に生じた現象である。

本稿の目的は、個別主体間の認識の同型性を構築し、この現象を改善することである。差異の共有という方法によって論争の状態は改善されると仮定し、この方法を評価段階での市民参加の手法として政策提言することを目的とする。差異の共有とは、多様な意見の存在と一致点を明らかにし互いに存在を承認し合うこととする。認識の同型性の構築とは、自他の問題認識の違いが相対的に同形であると各主体に意識されることとする。

本稿の政策学的な問いは、「交通まちづくりの論争的な問題についてどのようにすれば意見の

差異の共有は進むのか」である。

本稿の研究方法は、問題を改善するために仮説的な手法を実践的に試み、改善して新しい仮説を提案する研究であるので、このプロセスは臨床環境学におけるトランスディシプリナリイな連携関係であり、「作業仮説ころがし」という研究態度の一種であると考えられる。仮説的な手法を「意見を相対化する手法」「出来事を並べる手法」「聞きあう討議の手法」と呼んだ。具体的な研究方法は、第2章は資料・文献の分析、第3章は資料・文献分析と一部はアンケートとインタビュー、第4章は資料・文献分析、第5章は文献分析と探索的な社会実験である。

本稿の構成は、「事実」と対照された問題の全体像を構築する「認識プロセス」はどのようにすれば進むか（「意見を相対化する手法」（3章、4章）、「出来事を並べる手法」（5章））と、この全体像を理解し別の「ある像」を再構築する市民の「実践プロセス」はどのようにすれば進むか（「聞きあう討議の手法」6章）の二つのサブクエスションから成る。（6章）「認識プロセス」では、通常の論文スタイルでは背景にあたる出来事や言説を記述する。

## 第2章 本稿に関連する主な理論

2章は、関係する理論についてである。地域の論争的問題の改善を目的とする本稿は、大きく二つの研究分野にまたがる。本稿は、第1に研究の目的から見れば環境政策学の研究であり、地域環境問題の改善に資する方法の開発を目的とする。第2に題材から見れば交通まちづくり論の視点を援用したものであり、この視点が計画評価段階の分析・評価にも有効であることを例証する。

2.1節は、「交通」と「地域の変化」を、文脈を重視して分析する方法について、なぜそのような研究方法が必要なのか、これまでの交通と地域にかかわる研究の中ではどのような位置にあるのかについて述べた。2.2節は、「交通計画」「地域計画」の視点に加えて「市民参加」の視点を持つ交通論である交通まちづくり論を紹介し、評価段階へこの理論を拡張する必要があることを述べた。2.3節は、認識のズレから生じる問題を改善するための「差異の共有」の意義を、「討議」から「合意形成」にいたるプロセスの中で検討した。参加の討議の現場がしばしば混乱する要因の一つを、理論面から考えた。2.4節は、市民参加の討議の実践的な研究についてレビューした。差異の共有を目的とした討議デザインをどのように改善するか、その方法や研究方法を先行研究から検討した。2.5節はリニモ問題そのものを扱った研究を紹介した。

## 第3章 交通まちづくり論の視点とリニモ問題の「事実」

### — 上からのまちづくりの成功と限界 —

3章は、意見を相対化する手法の前段にあたる、事実からみて解釈を相対化する分析であった。認識プロセスの基礎となる分析として、リニモ問題の客観的と思われる事実を整理し、異なる言説や解釈につながったことを例示した。つまり事実から解釈を見た。事実を分析する理

論的骨組みは、交通まちづくり論の一般的な三つの要素（「交通」「地域の変化」「市民参加・活動」）に依った。これにより、分析の基礎となる「事実」が明らかになった。

#### 第4章 リニモ問題の言説と事実とを対照した意見の相対化

##### －「意見を相対化する」手法の開発と〈事実・解釈〉－

4章は、「意見を相対化する」手法の後段にあたる、解釈からみて事実を相対化する分析であった。3章とは逆にリニモ問題の言説を収集し、事実のどの側面をどのように解釈しているのか推察し、相対化した。4章の分析によって、人々の言説の分布とつながりぐあいを読み取れた。その結果、意見を相対化することにより、人々が相互の意見を相対的に理解できる素地ができた。論争的状态を改善するための前提が明らかになった。

第3章・第4章によって、事実から解釈を見ることと解釈から事実を見ることと、双方向の循環的な対照によって、認識の同型性を構築する「意見を相対化する」手法が得られた。また、交通まちづくり論の三つの要素に加えて、地域固有の「システム開発」「万博」「鉄道経営」の文脈があり、人々の認識はこれらの文脈の影響を受けていたのではないかという仮説が生まれた。

#### 第5章 出来事の経過と文脈、全体像の構築

##### －「出来事を並べる」手法の開発と〈経過・文脈〉－

5章は「出来事を並べる」手法の開発である。地域の変化の経過と相互作用の文脈を読みとるため、文脈と経過（年表）で出来事を並べることによって、人々の解釈フレームとなった全体像を構築する手法の開発を行った。出来事を採取し経過を追って並べる作業と、文脈から出来事の意味を読む作業との双方向の作業によって、順次変化していく出来事と文脈とが対照された、人々のマクロな解釈フレーム（全体像）の構築を進めた。

その結果、文脈のつながりぐあいで出来事（事実や定着した解釈など）を理解できるようになり、人々の意見が文脈の影響を受けていることを明らかにした。論争的状态を改善するために必要なマクロな見方ができる素地をつくった。

#### 第6章 市民の「聞き合う討議」による差異の共有

##### －差異の共有を進める実践手法の開発と成果－

6章は、市民の聞き合う討議手法によって、意見の差異が共有されるプロセスの例証であった。事例の討議の場の内部においては論争的状态が改善され、討議の場の外部へは『提言書』等の

公表と説明を行い、政策や事業へはコミュニケーションを通じて反映させた。前章までに明らかにした全体像をもとにこの討議を援助した。

このように聞き合う討議により、論争の状態が改善され、差異が共有されることを例証した。

## 第7章 結論

本稿は、交通まちづくりの評価段階にある、個別主体間の状況の定義のズレから起きたリニモ問題を題材に、認識の同型性を構築するために、差異を共有する方法を開発し、論争的状况を改善することによってその有効性を例証したという点で、環境政策学に貢献した。

研究上の課題として、試みた手法をより確かな仮説とするため、他の分野で個別主体間の定義が混迷した事例の追試や、集合的定義過程の事例での追試などが必要である。

今日では多くの政策・事業が評価段階にあるが、論争的な場合には問題を再定義することが求められるので、評価段階の市民参加の方法として、また、事前準備段階から論争的な事業では、差異の共有から始める方法として、本稿の手法を社会に実装するよう政策提言する。